都道府県別賞一等

もしものときの支え

埼玉県　三郷市立栄中学校　一学年

髙橋　彩音

みなさんは「保険」と聞いて、どんなものを想像するでしょうか。中学生の私たちにとって、保険はどこか遠いもののように感じられるかもしれません。しかし、私にとって保険は、幼い頃から我が家を、そして遠く離れた家族を支えてくれたとても身近で大切な存在です。私の祖母は約十年間、パーキンソン病という進行性の病気と闘っていました。そして亡くなる前の三年間は、施設と病院で過ごしました。祖母が施設に入ることになったのは、それまで自宅で一生懸命に介護を続けていた祖父が、突然、脳梗塞で倒れてしまったからです。二人が同時に動けなくなるという私たちの家族にとって最大といえる危機が、ある日突然訪れたのです。

それは私が小学二年生の終わりのことでした。遠方に住む祖父母が同時に倒れたので、両親が不安そうな表情をしていたのをよく覚えています。コロナ禍で県外の病院へ行くことが難しい時期に、日々の生活だけでなく医療費や施設の費用といったお金の問題が、一気に家族にのしかかってきたのです。私が小学二年生の終わりから、中学校に入学した直後までの約四年間、我が家はずっとこの大きな不安と隣り合わせの生活を送ることになりました。

時が経ち、祖父母が亡くなりとても寂しいですが、家族の生活も落ち着きを取り戻し始めました。当時のことを少しずつ理解できるようになった私に、親はある大切なことを教えてくれました。それが「あのとき、私たち家族を経済的にも精神的にも救ってくれたのは祖父母が入っていた保険だった」という言葉でした。倒れてからの数年間、私は保険のことなど何も知りませんでした。しかし、保険から支払われる給付金が、祖母の施設費用や祖父の入院費を補ってくれていたのです。もし保険がなかったら、私たちの生活はどうなっていたでしょうか。医療費のために親が仕事を辞めて介護に専念せざるを得ず、家族の笑顔が消えていたかもしれません。保険があったからこそ、遠方にいる私たちは自分たちの生活を壊すことなく、祖父母に最善のケアを受けさせることができたのだと知りました。

保険とは、お金だけでなく〝安心〟をくれるものだと親から聞いたとき、私は〝保険の大事さ〟を実感しました。保険とは、ただお金を受け取るための仕組みではなく、人生の「もしも」の事態が起きたときに、残された家族が絶望せず、前を向いて生きていくための〝安心〟を買うものだと気づいたのです。

祖父母は、自分が元気だった若い頃に、未来の家族のことを想って保険に入っていたはずです。それは、何年も先の私たちに向けられた、目に見えない優しさだったのではないでしょうか。自分たちが倒れたとしても、子供や孫に迷惑をかけたくないという強い想いが、保険という形になって私たちを守ってくれたのだと思います。

この夏休み、私は過去の経験を振り返りながら、保険について深く考えるきっかけをもらいました。世の中には、いつ、どんな不幸が襲ってくるか分かりません。だからこそ、お互いに支え合う保険という仕組みが、社会には絶対に不可欠です。私が小学生から中学生へと無事に成長できたのは、倒れた祖父母の想いと、それを支えた保険のおかげです。この感謝の気持ちを忘れず、私も大人になったら、大切な家族や周りの人を守れるように、保険の大事さをしっかりと理解し、未来へつないでいける人になりたいです。